



内子座 藝於遊



荒壁塗り①

令和8年8月後半から、荒壁塗りが始まりました。荒壁塗りもいろいろなシーンがありますが、大きくは2種類。竹小舞から修理して新しく塗る壁、補強のため片側の土を落とした壁です。右の写真は、左側1/3部分は竹小舞を新しくして、写真の反対側（外壁側）を新しく塗った壁部分、真ん中は竹小舞と外壁側はもとのままで、写真側（内壁側）を新しく塗っている壁部分、そして右側1/3は竹小舞が新しくなり、これから両面を塗っていく壁部分になります。

今回の保存修理工事では壁面での補強を施していくため、土を塗るのも通常とは異なります。ポリカーボネート補強板をとりつける面は、荒壁も竹小舞が隠れる程度の厚みで塗る必要があります、通常よりも薄く仕上げる必要がありますが、熟練の技できれいに仕上げられています。また、壁の復旧工事は土づくりから始まります。この土には、内子座から解体された壁土の一部も再利用されています。110年の時を経て生まれ変わりがつながらつながら内子座に感動です。



▲写真左：荒壁用の土。藁すさを加え、土を練りながら半年ほど寝かせ仕上げていく。▲中：内子座から解体された壁土。風化が進み粘りがなくなっているが、新しい土と混ぜ合わせることで新しい命が吹き込まれる。▲右：土を練っている様子。藁すさと水を混ぜ合わせるのには、耕運機が活躍している。

文化庁係官現地指導

令和8年8月21日、文化庁調査官を招いて修理等に関する指導を仰ぎました。解体工事が完了し調査をする中で、これまで見えなかった新たな補修部分がでてくるなどし、それらに関する修理方針について指導していただいたほか、補強に関する細かな点についても確認を進め、工事へのGoサインをいただきました。

